初代中村七三郎と俳人の交流圏

稲葉有祐

――要旨

初代中村七三郎は元禄期を代表する歌舞伎役者である。少長と号して俳諧を嗜み、物故の際には追善集『のこる露』が上梓されている。ただし、同書が無名作家による小冊であることから、七三郎は当時の江戸俳壇の中心から離れた存在だったと位置付けられている。そこで本稿では、元禄期の俳書を調査し、句の贈答や入集状況等をもとに、その交流圏を考察することで、七三郎が江戸俳壇の中心人物である蕉門の其角と親交を持ち、また、当時勢力を保持していた調和や不角らの周辺俳人とも交流、また京俳人や、其角門でもあった赤穂浪士らとも近い距離にいたことを明らかにする。さらには、本調査により、原本は所在不明ながら、断片的な記事から、『のこる露』以外にも江戸俳壇の重鎮らによる追善集が刊行されていた可能性のあることが判明した。七三郎をモデルとした浮世草子、後代の役者による顕彰、都市江戸におけるシンボル化という問題も併せて考察する。

はじめに

初代中村七三郎（寛文二年〈一六六二〉～宝永五年〈一七〇八〉）は、貞享五年〈一六八八〉三月、「丹前姿鏡」（市村座）の丹前踊りで大当たりを取り、初代市川団十郎、同中村伝九郎とともに「関東三幅対[1]の名物男」（『役者舞扇子（まいおうぎ）』元禄十七年〈一七〇四〉四月刊）と称された、元禄期を代表する役者である。

「中村殿は花をもつぱらにして、花車ふうりうを専にし給ふ名人。団十郎殿は実をもつぱらにして、あら事田夫な芸を専にし給ふ名人也」（『役者略請状（やくしじょう）』同十四年三月刊）と、特に団十郎とは和事師・荒事（あらごと）師としての芸風を対称化されたが、飯島満氏[2]によると、七三郎が評判記「江戸」の項の巻頭を飾った回数は『役者口三味線』（同十二年三月刊）以降『役者色将棊大全綱目』（宝永五年〈一七〇八〉二月刊）までで通算十一回、次席に甘んじたのは『役者万石船』（元禄十四年

〈一七〇一〉三月刊）・『役者二挺三味線』（同十五年三月刊）の僅か二回である。団十郎を遥かに凌ぐ人気を誇り、「お江戸立役の開山」（『役者友吟味』宝永四年〈一七〇七〉三月刊）と位置付けられた七三郎は、江戸歌舞伎界の中でも殊に際立つ存在だったといえる。

その七三郎が少長（小）と号し、俳諧を嗜んでいたことは、志田義秀[3]氏によって既に紹介されている。氏の確認した作は次の四句である。

白魚はいづれへうつる角盥　　小長
（『華担籠（はなおうこ）』享保十二年〈一七二七〉成、同十四年刊）

恋やせむ弥陀や唱むけふの月　　古少長
（『犬新山家』同十八年奥）

梅華菜種は何を飾るやら　　古少長
（『東風流（あずまぶり）』宝暦六年〈一七五六〉刊）

三囲（みめぐり）や浅く咲たる初ざくら　　少長
（『古今役者四季発句合（ほつくあわせ）』同年刊）

そして、七三郎物故の際に上梓されたのが追善集『のこる露』[4]（宝永五年〈一七〇八〉刊）である。ここで俳人達との交流が看取されるところであるが、ただし、志田氏は同書について「小冊である上に甚だ投げやりな出来。少長の遺句もなければ名の通った俳人の悼句もない。製本や板下も粗末」と述べ、江戸の役者俳人の嚆矢とされる初代団十郎（俳号、才牛[5]）の二十七回忌集『父の恩』（享保十五年〈一七三〇〉刊）の豪華さと比較しながら、「生前は句作は同等くらいに見られていたと見られるが、才牛ほど少長は注目を引かなかったか」と推測する。また、今泉準一[6]氏は「集中の作者名を見ると、ほとんどが無名の作家」であり、「とにかく、中村七三郎と云えば、団十郎と並び称せられた名優である。それにしては、あまりに地味な追悼集」と評している。すると、七三郎は当時の江戸俳壇の中心からは離れた存在だったのであろうか。

筆者はかつて、団十郎・伝九郎らとも交流のあった蕉門の其角（きかく）とその門流の活動を追うことで、江戸俳諧と役者との繋がりを考察したことがある[7]。旧稿を承けつつ、本稿では交流圏という視座から、七三郎の俳壇における位置について再考する。

一、七三郎の上京と餞別吟

七三郎は延宝期の立役、天津七郎右衛門を父として寛文二年〈一六六二〉に生まれる[8]。中村座に所縁のある役者で、当初は『野郎（やろう）三座詫（さんざたく）』（貞享元年〈一六八四〉三月刊）に「若女のきりやうをみがき給ふ」と記されて挿絵にも描かれる等、女形に扮したこともあったが、間もなく立役となり、貞享五年〈一六八八〉三月、「丹前姿鏡」の丹前踊りで人気を博した。丹前とは、美麗を尽くした風呂屋、特に神田の松平丹後守上屋敷前の風呂屋に通う伊達男・侠客の

派手な風俗で、「丹後守前」を略した呼称である（『昔々物語』元禄二年〈一六八九〉序）。丹前は舞台の演技にも取り入れられ、『野郎役者風流鏡』（貞享五年〈一六八八〉七月刊）中、七三郎の項に「およそ丹前ふうのみなもととは、たれいわぬものなし。たてがみにてとうせいりうの白つかを十もんじにさしこなし、橋懸りを一ふりふつて出給ふ有様は、どうともこふとも申されぬ」と記される。これは立髪で当世流の長い白柄の大小（刀・脇差）を十文字に差し、六方を踏む七三郎の丹前を評判したもので、【図版Ⅰ】『風流四方屏風』（元禄十三年〈一七〇〇〉刊）には鳥居清信によってその姿が描かれている。

また、「丹前姿鏡」と同月の上演になる「鎌倉五人女若殿原楽遊」初恋曽我四番続」（市村座）で曽我十郎祐成を演じて和事師としての芸風を確立、その地位を決定的なものとする。この間、七三郎は貞享四年〈一六八七〉に中村座を退座し、翌五年に市村座で一年間勤めており、後、山村座へ移り、宝永元年〈一七〇四〉に中村座に戻るまでの十三年間、座元同然の待遇を与えられていたという[9]——当時、江戸の四座は堺町（中村座）・葺屋町（市村座）・木挽町五丁目（山村座・森田座）にあった——。とはいえ、『役者大鑑』（元禄五年〈一六九二〉二月刊）に

江戸の座もとが取はなさぬゆへ、京ぶたいをふみたまはぬがきのどく。それゆへ上々の役者と思へども、上文字でこらへまする。是非上々とよばれたくば、京ぶたいをふみ給べし。いかにしても男のつきよく、京むきの役者なり。

とあるように、上方行きを待望されてもいた。諏訪春雄氏[10]は美男であることに加え、「京都では廓の場面などで見せる、ぬれ、やつしといった演技に堪能であることが、立役に対する評価の一基準として、非常に重んじられた」と指摘する。鳥越文蔵氏[11]によると、七三郎の芸には「荒事」・「うれい事」・「軽業」・「傾城事」・「実事」・「所作事」・「セリフ」・「丹前」・「鳴物」・「濡事」・「半道」・「武道」・「振出し」・「本間事」・「やつし事」・「六方」の十六種があり、中でも「ぬれごとのかいさん、京・大坂にも、非類なる上手としるべし」（『役者大鑑』）と評された濡事が得意であったという。そこで、元禄九年〈一六九六〉正月、「不破名古屋初冠」（山村座仮小屋）の山三郎役で大評判を得た後の翌十年、京早雲座に招かれ、一年間の上京を果たすこととなる。出立にあたり、江戸俳壇の中心人物、蕉門の其角が次の餞別句二句を贈っている。

図版Ⅰ『風流四方屏風』「中村七三郎」（『近世日本風俗絵本集成』（臨川書店、一九七九年）より転載）

餞少長上京

うら枯に花の袂や女ぼれ　（『五元集』延享四年〈一七四七〉刊）

中村少長、夫婦連にて上京せし時

山鳥も人をうらやむ旅寝哉　（同「拾遺」）

「うら枯に」句は、木々の枝先や葉先が枯れて、荒涼寂莫たる光景の中、華々しく、颯爽と上方へと旅立っていく姿に、女性たちは夢中になるとの意で、七三郎が「好色第一のつや男」（『役者大鑑』）・「女殺伊達濡随一」（『雨夜三盃機嫌』元禄六年〈一六九三〉正月刊）等と評判されることを受けての吟であろう。『役者大鑑』（同八年正月刊）には「もとよりおとこつききれいにして、こわいろにまでしぜんとぬれをふくみ、ぼつとりとにくげのなきしだしなれば、女中のすくもどうり也」と紹介される。「山鳥も」句は、仲睦まじい夫婦での上京の旅路を、柿本人麿の「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」（『拾遺和歌集』巻十三）に象徴されるような、雌雄別れて夜を過ごすという独り寝の山鳥はさぞ羨むであろうとの意。七三郎の妻は、中村勘三郎の娘であったという[12]。伊達男の面目躍如たる餞の句々といえる。

両者の交流圏の一端が窺えるのが、里圃[13]の編著『誹諧翁草』（同九年刊）である。其角は発句九他が入集、その内の一に芝居に関連する「花さそふ桃やかぶきの脇おどり」句が掲載される。「脇おどり」とは、幕開けの三番叟に続き、本狂言の前に演じられた祝言的・儀礼的な要素の強い踊りで、句は、本狂言を導く脇踊りは桜を開花に誘う桃の花のようだとの意。そして、同書には「苞（フゴ）に釣ル赤子は桃の花見哉　小長」の句が載る。「苞」は竹や藁、縄等で編んで四隅に紐を付けた運搬用具のこと。その苞を揺り籠代わりにした赤子が、あたかも花見の如く桃の花を愛でているようだとの句で、前述志田氏には言及がないが、七三郎の作と見てよかろう。

その後も其角は「少長が宅普請の時に」（「きねがさき」[14]『類柑子（るいこうし）』宝永四年〈一七〇七〉跋）云々と新宅普請の折に訪問する等交流を続け、門人らには「団十・勘三・七三・伝九・平九、山村へ、幸左衛門・伝吉と入組申候」（『元禄十七年〈一七〇四〉三月十日付紫紅宛書簡』）と、顔見世の様子を報告している。毎年十一月の顔見世は各座における新規顔ぶれのお披露目興行であり、江戸人士の楽しみの一つであった。其角に「顔みせや暁いさむ下邸の橋」（『五元集』）との句がある。『史記』や謡曲「張良」等で知られる張良と黄石公の故事を踏まえ、早朝から勢い込んで、下邸の橋ならぬ顔見世に向かう客の心境を活写する句である。其角は上京当時七三郎の所属していた山村座の所在地である木挽町について、「十三夜を／やよや月夜は物なき木挽町」（『五元集』）と詠み、「やよや」と十三夜の月に呼び掛けつつ、芝居町の昼間の賑わいから一転した、静寂な木挽町の夜景も描き出している。

元禄期の江戸俳壇は其角・嵐雪ら蕉門が中心となり、それに露沾系の沾徳が加わりつつ、調和・不角らのように、前句付に転向しながらも勢力を保つ宗匠らが複雑に入り乱れる状況を呈する。その中で、艶士編『水ひらめ』（同十一年刊）は七三郎の位置を考える上で

重要な俳書である。同書は編者が露言（調和門、後、露沾門）門から調和門に転じた際の記念集で、艶士と青洋（調和門）による餞別句及び七三郎の返句による次の一連がある。

中村小長上京餞別二句

古郷を何になれとや秋の風　艶士

薄紅葉甘イ酒にて思出せ　青洋

上京とて申残す

秋風のミを入てこそ置土産　小長

艶士は江戸に後ろ髪を引かれず、京で精一杯活躍してくるようにと激励し、青洋は白居易の詩「寄-題下送二王十八帰一山仙遊寺上」の一節「林間煖レ酒焼二紅葉一」を踏まえつつ、上方の甘い酒を飲んでは江戸のことを思い出してほしいと送り出す。「京師酒雖レ良甜過、上戸不レ好者多」（『和漢三才図会』正徳二年〈一七一二〉序）と、京都の酒は甘口であった。そして、七三郎はそれらに対し、「秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらになるらむ」（『古今和歌集』巻十五・紀友則）のように、秋風は人の身を分け、心の中に入り込むわけではないのに、秋になると「飽き」てしまって思いが上の空になると歌われるけれども、人に飽きられぬよう、身を入れ、一所懸命に務めてきますと応え、旅立っていく。

艶士は調和系の中でも蕉門に近しく、『水ひらめ』には其角の句十九が入集、「秘蔵がる鍋の軽さや筑摩汁　其角／蒲団を四ツに折て上段　艶士」以下、岩翁・尺草・常陽[15]・松貢・山夕・執筆による世吉が載る。また、京大原を舞台とする其角の俳文「小原木の詞」や嵐雪の「京にて／蒲団着て寝たる姿や東山」句が収められており、一部、七三郎の上京に併せた編集・構成がなされたかと推測される。七三郎は其角ら蕉門と調和門の俳人らの中にいたと捉えることが出来る。

二、七三郎、京での反響

元禄十年〈一六九七〉、七三郎は京早雲座の座元山下半左衛門に招かれ上京、十一月の顔見世「都ノ恵方嫁入文章」に出演する。半左衛門は「七三とならべて見たし」（『古今四場居色競百人一首』同六年正月刊）と評判されていた役者で、七三郎への期待も高かったことと推測される。ただし、当初は万太夫座での顔見世における水木辰之助の「七化け[16]」の人気に押され、さらに翌年正月の「不老門」も辰之助の「女ゆりわか」に完敗して不入り、見物が「青蠅たかりぬ」（『二の替芸品定』享保十六年〈一七三一〉三月刊）という有様だったという。『役者口三味線』には「男小ひやうにして、物いひおちつかず（中略）あんまりかるすぎて、あぢはひがおりない」とあり、「七三ぶた」（『役者大福帳』宝永八年〈一七一一〉三月刊）とまで悪評される。

しかし、元禄十一年〈一六九八〉正月二十二日、岩井左源太・芳沢あやめと共演した「傾城浅間嶽」（早雲座）での浅間巴之丞役が大当たりして評価が一転、急上昇し、「ちいさい男がぶたい一つぱいにみゆる事、江戸役者のくせおかし」（『三国役者舞台鏡』同年十一月刊）、

「あづまそだちのあら男とは見えぬ、花の都にうつてつけたる生質」（『むさし鐙』同十二年正月刊）と賞賛されるに至る。「傾城浅間嶽」は七三郎の作といわれ、百二十日の興行を勝ち取る。

『十能都鳥狂詩』（同十三年刊）は、その七三郎の人気を受け、賛美した評判記である。作者は若松梅之助こと京の俳諧宗匠、鷺水（青木氏）。同書は「表」に狂詩と挿絵、「裏」に評と発句を記し、「表」の挿絵部分には七三郎が上京中に出演した演目が記される。梅林堂華蹊の序文は、そのそれぞれの演目を「浅間の嶽のけぶり高く」（「傾城浅間嶽」）・「実を三勝につくして」（「三勝心中」）・「畳刺の窶し気を転じ、猿曳つかひ得て見事に」（「心中いろは茶屋」）・「濡を湿暮理と、葛城に鳴す」（「男道成寺」）・「丹前の小六振出しわけて風流」（「関東小六」）・「時宗が武道いきほひ尤つよく」（「絵入曽我」）・「祐成が所作、かげの十番切さても新う」（「大磯万年亀」）・「鳴物を物見の松にやどらせ」（「行平物見の松」）・「根怪を稲荷塚に堆うす」（「狐会」）・「買倒の紙来、単羽織に意気をかるう着なし」（「稲荷塚」）等と交えながら、同十二年冬の暇乞狂言「稲荷塚」までを綴っている。

例えば、同書「傾城浅間嶽」の項の「表」には、挿絵（【図版Ⅱ】）の上部に「題　揃／窶姿編笠小歌妙／如出濡風弥徙申／咄笑牢人衰羽織／十筋祖様最情身」とある。「揃」とは、遊廓で浮かれ騒ぐことをいう。これは駕籠かきに身をやつしていた巴之丞（七三郎）が禿を後ろに隠して小歌を歌わせ、自分が歌っているように口を動かす滑稽、起請文を燃やした煙から突如傾城奥州の生霊が現れる怨霊事といった、劇中の名場面を詠んだものである。

大好評を博した、碁盤嶋の羽織を碁盤に見立てる口説の場面は、挿絵に描かれ、「揃裏」に次のように記される。

揃の妙なる事。身ぶり目づかひ。どこにからくりがあるかしらぬ。あさまがだけに嶋の羽織。碁盤にして。碁の手に秀句をいはれたる事。古今無類の図にして。底根めづらしい仕出し。中村の名は浅間山よりも高う成。洛中洛外の是沙汰。今も裏屋の姥口鼻たちも。茶ものがたりにせらるゝは無理では御ざるまひ。

碁によせて口説かばゆるせ花の肌

嫉妬に憤る傾城奥州に対し、巴之丞は「あ痛しこ、目から火が出た、目が潰れます。とかく人に構わず、碁を打つまでじやまで。さいわひ羽織が碁盤島」と、羽織を脱ぎ、畳んで膝の上へ乗せて、「茶碗の割れを碁石とし」以下、囲碁の用語を縦横に駆使してあて狂言を繰り広げる。これを「古今無類」と誉め讃え、巷を賑わす七三郎の人気に言い及ぶ。句は、その口説を詠んでいる。「傾城浅間嶽」の反響については、序文でも「抑この艶男手柄すくなからぬ中に、揃を碁盤嶋に移して賢くも作意せる事、美は古今に恋に、妙は人口に喧し」と触れられている。

ここで作者の鷺水に注目してみると、早くは元禄五年〈一六九二〉に刊行した『春の物』で「妖ながら狐貧しき師走かな」の其角句を入集させており、『俳林良材』（同十年刊）では芭蕉を「日東の杜子美なり。今の世の西行なり」と絶賛、発句十三、付句十一を掲載しつ

つ、其角をそれに次ぐ発句十入集と厚遇している。鷺水と七三郎との関係性には、其角の交流圏を仲介として想定すべき可能性があるかもしれない。[18]

また、『十能都鳥狂詩』序文には「業平の濡を恋慕に好するも。厥むかしとなり。中村の今様おとこ。一身に十能を得て。野推その風をしたはずといふ事なし」ともある。これは七三郎が在原業平の伝統的な色男像に擬えられ、「御器量はわたもち（筆者注・生身）の業平とも申ぞかし」（『野郎役者風流鏡』）、「此人、一名日本好色若丹前の氏神、わた持の今業平」（『古今四場居色競百人一首』）等と賞されていたことによる。元禄十二年〈一六九九〉、七三郎の帰江に際し別れを惜しむ声は止まず、「七三びいきな女中は、なることならば、江戸へつれだつて下らんなどゝいふも有。又お姿を拝する迄のかたみに、たんざくを一枚とねがへば、しばゐ過から、波屋でちよつと、お盃計と望む後家ども有。京をたゝるゝ五七日は、あなたこなたへ、引つり、引はり、賞翫せらるゝ」（『役者談合衝』同十三年三月刊）との有様[19]であったという。女中らが「短冊」を求めている点は注目されるが、「往古よりあづま役者の都のぼり、京の見物に跡の跡迄しのばれ給ふは、此人一人より外をしらず」（『役者略請状』）との評判を残し、七三郎は京を立っている。

図版Ⅱ『十能都鳥狂詩』「題揃」
（国会図書館デジタルアーカイブより転載）

三、『好色美人角力』と桃隣をめぐって

江戸に戻った七三郎[20]は「傾城浅間嶽」を度々上演、元禄十三年〈一七〇〇〉には京で好評だった「傾城弘誓舟」の狂言取として「傾城蘭麝躰」を披露し、同十六年には「傾城仏の原」の江戸版を演じる等、上方の歌舞伎色を積極的に江戸に移入[21]、さらに、元禄末年から上方よりの下り女方が激増することを受け、江戸の女方の育成に力を入れていく[22]。他方、元禄から宝永にかけて、例えば、桃林堂蝶麿作『好色美人角力』（元禄九年〈一六九六〉刊[23]）・西沢一風作『女大名丹前能』（同十五年刊）・忍岡やつがれ作『関東名残の袂』（宝永五年〈一七〇八〉刊）、独遊軒梅吟作『風流鏡が池』（同六年刊）といった、七三郎をモデルとした人物の登場する浮世草子が作成されるとの動きもあった。

この内、『好色美人角力』を中心に取り上げ、交流圏の問題につい

て検討する。同書は七三郎をモデルとした美男の主人公、色山七三郎と、富士屋幽松（石原の楽隠居）の妾おこまをはじめとした計十名の女性との恋模様を描く。書名は角力の四十八手を恋の決まり手とすることに因む。

作者は桃林堂蝶麿（紫石）。柳亭種彦が『好色本目録』（天保年間〈一八三〇～一八四三〉成）で言及して以来、蕉門俳人の桃隣と同一人物であるか否かが問われている。種彦は桃隣ではないとの判断を下し、諸説を整理した松尾真知子氏[24]も別人説を採る。ただし、酔生書菴人[25]が指摘するように、確かに蝶麿の浮世草子には俳諧と前句付の趣向が取り入れられており、例えば『好色桐の小枕』（元禄十六年〈一七〇三〉刊）では「中にも誹諧はやまと哥の一もとにして、人のこゝろをやはらぐる業（わざ）なればにや」云々とも語られている。少なくとも、蝶麿を「作者江戸の俳諧師」（『好色本目録』）とすることは首肯されよう。そこで、以下、江戸俳壇における桃隣の位置について確認する。

桃隣は天野氏。芭蕉の縁戚（『本朝文鑑』享保三年〈一七一八〉跋）とされ、別号を太白堂という。伊賀上野に出生した後、大坂に暮らし、元禄四年〈一六九一〉、芭蕉に従って下江し点者となる。同七年の芭蕉物故に際しては嵐雪と義仲寺に駆け付け、追善興行に其角らと一座する。「此人にはいろいろおかしき咄多し」（『俳諧問答』同十一年奥）と様々な逸話のある人物であったらしく、芭蕉三回忌には『おくのほそ道』をたどる奥州旅行に出掛けている。『陸奥鴂（むつちどり）』（同十年跋）はその折の記念集である。

『陸奥鴂』には元禄九年〈一六九六〉三月十七日の出立に際しての餞別吟が作者の肖像とともに掲載される。本稿に関連する俳人については【図版Ⅲ】に示した。其角の餞別は難解で知られる「饅頭で人を尋ねよやまざくら」句で、中には七三郎と交流のあった先の艶士の「松島へ心ざす人に／貫ざしも花にはなくせ料理食」句も見出せる。艶士は計四句が入集し、肖像こそないものの、青洋の入集（二句）も認められる。翻って、『水ひらめ』を見ると、桃隣の「蝸牛百日紅の木末まで」・「名月や九つ時を物の種」の二句が入集していた。また、『陸奥鴂』には調和の餞別句「それは宮古人、これは桃隣／長橋の萩てふ若葉袖にせよ」が掲載される。前出松尾氏は、江戸における前句付の中心人物である調和が、同十年頃、嵐雪や桃隣（特に後者）と交流を深めていたことに言及するが、艶士・青洋らの動きもこれと軌を一にするものと考えられる。

桃隣の奥州行には不角も餞別句を贈っている。不角は元禄三年〈一六九〇〉には前句付の月次興行を開始、高点付句集『二葉の松』を出板する等、調和とともに江戸前句付界を牽引する存在である。書肆を営み、先の『水ひらめ』の再板元[26]でもある。「奥すじの客をよふたらさんす」（『花見車』同十五年刊）と、特に東北地方に多く門流を擁しており、『陸奥鴂』にも彼らの名は散見される。松尾氏は、桃隣が不角（及び調和）の勢力圏を旅していたことを指摘する。不角の餞別句は「一人行桃隣、為仲のまねはならじ／関越ん花にはせめて替草鞋」で、以下計五句が入集する。一方、元禄十五年〈一七〇二〉の不角歳旦に「鼻でやり師走人果の古法眼　桃隣」、不角編『俳諧一峠』（翌十六年刊カ）には同十六年四月の不角の剃髪を賀した「青梅や法師に成て堆（ウヅタカ）き　太白堂　桃隣」との句が掲載される等、以

饅頭で人を尋ねよやまざくら　其角

古人の跡を慕ふとや
陸奥のはなに千鳥も声有歟　常陽

鳥に落て蛙にあたる椿かな　桃隣

松島へ心ざす人に
貫ざしも花にはなくせ料理食　艶士

一人行桃隣、為仲のまねはならじ
関越ん花にはせめて替草鞋　不角

それは宮古人、これは桃隣
長橋の萩てふ若葉袖にせよ　調和

惜暫別
虚空を引とゞめばや鳳巾　嵐雪

図版Ⅲ『陸奥衞』（愛知県立大学長久手キャンパス図書館蔵）

後も桃隣と不角との交流は親密である。

その不角の門人には文角こと絵師の奥村政信がいる。政信は七三郎の最後物語とされる浮世草子『関東名残の袂』で挿絵を担当するが、同書巻三に「いよ〳〵御夫婦ながら御息才、この比法橋不角かたへ前句、長崎屋の残春丈の手合百十九人やりましたが、身共はそこ元の御句が、こちの組の一番ぢやとおもひます」云々と、不角の前句付に言及があること等から、作者の忍岡やつがれもその人かと推定されている。[27] 加えて政信は宝永五年〈一七〇八〉の七三郎の死に当て込んだ『風流鏡が池』でも挿絵を描いている。同三年の不角歳旦において、「万歳や舞鶴形リに畏リ　梅吟堂文角」（独吟半歌仙発句）とあることからすると、作者の独遊軒梅吟も政信である可能性が高い。[28]

なお、『東行撰集抄』（宝永二年〈一七〇五〉刊・柿衞文庫蔵）で、不角は浅草の幽松庵に滞留していた大坂の俳人東行の餞別に「しばし名残を惜しむべきも、かぎり有旅とや。さらば〳〵／まな合羽尾花とむべき袖もなし」との句を詠んでいる。同書には艶士・嵐雪らの参加も見られる。藤川雅恵氏は[29]『好色美人角力』での実在するモデルの存在に言及するが、同書で前出おこまが石原の幽松の妾と設定されていることは、交流圏という視座から見ると興味深い。前述のように、現時点で『好色美人角力』の作者が桃隣であるかを確定することは難しいが、少なくとも、桃隣が七三郎の周辺にいたことは間違いないだろう。ここでは、敢えて作者の桃隣説を否定せず、保留としておきたい。

四、七三郎、追善へ——江戸俳壇での位置

元禄十五年〈一七〇二〉十二月十四日、赤穂浪士が吉良上野介義央邸に討ち入り、吉良の首級を上げて亡君の遺恨を晴らすとの事件が勃発する。この出来事に江戸中は騒然となり、また、その行動が義挙であるか否かが問題となって論争が巻き起こる。幕府が対処に苦慮する中、堺町勘三郎座で赤穂事件を当て込む「曙曽我夜討」が上演され、三日で停止命令が来たとの逸話（『古今いろは評林』天明五年〈一七八五〉刊）が伝わる。赤間亮氏は[30]、この「曙曽我夜討」を七三郎作かとされる「傾城阿佐間曽我」（元禄十六年〈一七〇三〉正月、山村座）ではないかと推定する。これが事実ならば、事件に際し、七三郎が真っ先に演劇化に動いたということになる。もちろん、江戸を震撼させた事件であるから、時事的な関心によってこれを題材としたとすることは容易だろう。だが、交流圏を視野に入れると、もう少し特別な意味を読み取るべきことに思い至る。七三郎の句が入集していた前出の『翁草』に、例えば「春の野や何につられてうハのそら　涓泉（萱野三平）」・「身のかるき生れ付也種瓢　進歩（寺坂信行ヵ）」・「素湯呑ッでごろりとハ寐ル冬の寺　子葉（大高源吾）」・「人の気やゆがまずすねず篊竹　如柳（間光興）」・「蚊柱や蝙蝠破る跡よりも　竹平（神崎則休）」等と、赤穂浪士（当時は藩士）が句を寄せているからである。

「富森、誹名は春帆。大高源吾、子葉。竹平・進歩と申候も門弟に而御座候」（『元禄十五年〈一七〇二〉十二月二十四日付其雫宛其角書簡』）

と記すように、其角も彼らの周辺にいる。『橋南』[31]（宝永二年〈一七〇五〉刊ヵ）には沾徳・沾洲・香山・春帆・子葉・涓泉による六吟「うぐひすや」歌仙等や諸氏による赤穂浪士追悼句三十三があり、其角や艶士（眉丘）・里圃らも句を寄せている。また、其角門の来示作、其角加筆かともされる『吉原徒然草』[32]（宝永六年〈一七〇九〉頃成）上巻第十四段には「文は傾城武道桜のあわれなる巻〳〵、文ほうご、西鶴がことば、一代女」と、西沢一風の『傾城武道桜』（同二年刊）を西鶴の『好色一代女』（貞享三年〈一六八六〉刊）と並び称するという記事が載る。『傾城武道桜』は、赤穂事件の顛末を大坂新町の遊女達による敵討ちとして描いたもので、赤穂事件を扱う公刊された浮世草子の嚆矢[33]とされる。浪士と身近に交流していた江戸の俳人達にとって、討ち入りは衝撃的な出来事だったであろう。あるいは京の鷺水もまた、『橋南』に「御盛や一口物をかへり花」句を寄せ、赤穂事件を材とした『高名太平記』（刊年未詳）を出板している[34]。このような雰囲気の交流圏にあって、「傾城阿佐間曽我」は、七三郎の役者としてのいち早い反応であり、心意気であったように見受けられる。

元禄十六年〈一七〇三〉、其角は「江戸に七三郎あらんかぎりは、似せもの合点いたさぬわけ御制禁可被成候」（『同年丈艸宛其角書簡』）と、風羅念仏で芭蕉を売り物に一儲けしようとした同門の惟然に対して憤慨し、啖呵を切る。「江戸に」とあるように、其角は七三郎を江戸の象徴的存在と認めていたことが分かる。かたや其角も、「東より上方へ向（むかわ）ん物はといふに、其角が誹諧であらふ」（『誹諧よりくり』同年刊）と、上方に対抗する江戸の唯一の存在として世に知られていた。宝永四年〈一七〇七〉に其角、翌五年に七三郎が相次いで没するが、「惜むべくしていたむべきは晋子・小長が早世なり」（『一言俳談』同六年奥）と並称されるのは、両者が元禄期の江戸を体現する存在だったからであろう。其角は寛文元年〈一六六一〉、七三郎は翌二年生まれなので、二人は同年齢で亡くなっている。

七三郎の追善集として『のこる露』が編まれたことは前述した。編者は藤橋・柳丁ら。総勢七十九名（御弓丁有明組含む。他、俳号不記九句）の作者が句を寄せ、東朔・柳丁・如文・藤橋・仙下・梅鷹・和水・円水による八吟百韻、梅鷹独吟三物を収める。連衆は無名作家が目立つが、名の通る俳人では、其角に親しい百里（嵐雪門）・甫盛・琴風や、其角門では先の来示や寒玉ら数名の入集が見られる。また、肩書に「京都」（立皷・竹宇・波子）、「伊丹」（今夕・露道）とある俳人がおり、今泉準一[35]氏によると、竹宇は「其角俳諧同調者」。子葉編『二つの竹』（元禄十五年〈一七〇二〉刊）では了我（貞佐）・東潮・子葉と四吟歌仙を巻き、自身の編著『並松（ならびのまつ）』（宝永三年〈一七〇六〉刊）には其角二句・桃林（隣）一句・嵐雪六句が入集しており、江戸蕉門（及び子葉）と近しいことがわかる（以下、傍点引用者）。

花の雪茶碗のかけよ碁盤嶋　京都　竹宇

すけ成に二度の別ゝや百千鳥　晩成

今年から二月曽我よなみだ雨　桜田　省我

竹宇は「さいわひ羽織が碁盤島」・「茶碗の割れを碁石とし」云々と

の「傾城浅間嶽」の名場面を踏まえ、七三郎を失った喪失感・欠落感を雪に見立てた落花に託す。晩成・省我は当たり役の曽我十郎祐成を詠み、往時を偲ぶ。井上伸子氏[36]によると、元禄十七年〈一七〇四〉、中村座に戻った七三郎は初狂言に曽我物を上演、毎年十郎を演じ、これが各座にも広がって、初狂言は曽我物という江戸の慣例が築き上げられていったという。『役者友吟味』に「七三は丁ど十郎男。それゆへ柳原青蛙が誹諧の冠、いつ迄もといへるに、はて十郎は七三郎と付句、一番勝にせられた。お江戸中、尤とのほうび也」とあるように、当時、十郎役といえば、誰しもが七三郎を想起するのであった。その他、集中、「釘抜の紋を凧に尽(エガヒ)て高キことを弄ス」と前書した「番町へ切レ行紙鳶の行末は　旭志／釘抜も折レし泪の朧月　一和／釘ぬきもなミだに霞ム凧　秋林」の三句等、七三郎の二つ釘抜きの紋を詠んだ句や、「泪うる墓所に其角が桜守リ　丹水」と、其角に言及する句も見られる。本書について、今泉氏[37]は「集中の作品にはかなり稚拙な作品も散見することから、多分本書は、少長の生前に親交のあった人々の手になる、内輪の、しかし情の通った追悼集ではないかという想像が可能」と評している。

では、江戸俳人が七三郎の死を悼んだのは、この小冊『のこる露』のみだったのであろうか。由誓編『素堂家集』の次の記事は、他にも『梅の時』なる追善集が存在していたことを断片的を語っている。

いきて人をよろこばしふるほど死して人をなかしふることはり、今猶昔におなじ。世に名だゝる中村七三郎、過にし初三日の夜、みまかりけるに、辞世とおぼしくて、梅になたねを結びて、一句をのこせり。かつしかの同郷に追悼のこゝろざしあり。予もまたなきをうつされて

たきさしやそ朶の中よりこぼれ梅

といひてさりぬ。（以下略）

右は「梅の時序」として掲出される文章である。素堂は宝永五年〈一七〇八〉二月三日の七三郎の死について述べ、辞世句に言及する。「梅になたねを結びて」とあることからすると、これは『東風流』所収の「梅華菜種は何を飾るやら」句を指すのであろう。書名もこれに因むと考えられる。「そ（麁）朶」とは切断した木の枝のこと。梅は香を賞美する。『素堂発句　白蓮集解説』[38]（万延元年〈一八六〇〉成）は、句を「少長は、中村七三郎。徘優(ママ)の名高し。是を名香にたとへたる、誰か過たりといはんと。麁朶は其数にもあらぬにや。其中より炷さしさへ匂へると、ひとり少長のすぐれたるを賞して、死せるを悼るならし」と解説する。序文末尾には「かくれがの芝居の市に花ちりぬ」の句も掲載される。また、其角没後、門弟の中心人物だった貞佐の『桑々畔発句集』（寛延二年〈一七四九〉刊）にも、「梅の時」と出典を明記した「古小長を悼む／兵ハ欠て雨夜の塀の梅」句が掲載されていることが確認できる。現在、原本の所在が不明で、その規模は明らかでないが、重鎮の素堂が序文を書き、貞佐が句を寄せること、七三郎の人気と、その交流圏等から総合的に推断すると、『梅の時』は、恐らく江戸俳壇を挙げての追善集となっていたのではないだろうか。

おわりに

七三郎と俳人の交流圏について検討し、江戸俳壇における位置について確認してきた。七三郎は其角を中心とする江戸蕉門に加え、調和・不角らの周辺にもいたと考え得ることがわかり、上方の鷺水からは評判記が出されていた。「傾城浅間曽我」といった赤穂事件を巡る演劇化からは、その背景に七三郎を取り巻く交流圏の雰囲気が見え隠れする。正木ゆみ氏[39]は、元禄期の浄瑠璃と歌舞伎との関係を論ずる中で、「上方歌舞伎色の濃い浄瑠璃が江戸の役者七三郎を触発し、それが契機となって、芸風を異にする江戸歌舞伎にまで影響を及ぼしていた」とし、その交流に近松門左衛門が介在していた可能性を指摘している。七三郎の活動や、上方と江戸との文化的な影響関係の全体像を掴むためには、交流圏という観点からの、さらなる多角的・立体的な把握・考察が有効となろう。

さて、七三郎の後継者とされるのが、生島新五郎【図版Ⅳ】である。新五郎は元禄十年〈一六九七〉の七三郎上京に際してのお名残狂言「関東小六」（山村座）で小六の弟を演じ、愁嘆場で評判を得た役者で、小柄で美男、七三郎に次ぐ江戸和事師として人気を高めた。新五郎もまた俳諧を嗜み、其角の編著に入集する。『花摘』（同三年刊）所載「髪ほすに草のゆるがぬ涼哉　鉄蕉」・「白雨は天狗笑の梢かな　同」の作者が新五郎とされ[40]、以下、鉄松の号で、『萩の露』（同六年刊）に「名月に鷺もすゝまぬ粉（スハマ）かな」の発句を寄せ、同集「名月は」十四吟五十韻では其角・嵐雪・桃隣・平砂（貞佐）らと一座している。元禄十三年〈一七〇〇〉冬の上京時には其角から次の句を贈られている。

生島新五郎、上京に
鉢の木の扇笑ふなかへり花　（『五元集』）

句は謡曲「鉢の木」を踏まえる。「鉢の木」は、大雪の夜、貧しさゆえに自慢の松・梅・桜の盆栽を薪にくべて旅僧（実は北条時頼）をもてなした佐野源左衛門尉常世（げんざえもんのじょうつねよ）が、今は落ちぶれたものの、一旦鎌倉より招集があれば駆け付ける旨を述べ、次の年に緊急招集が出た際、古びた鎧・錆びた長刀を背負って、痩せ馬に乗って駆け付けたところ、時頼の御前に呼び出され、松・梅・桜に因む所領を恩賞として与えられるという筋。鎌倉への道中での詞章「常世が常にかはりたる。

図版Ⅳ『風流四方屏風』「生島新五郎」
（『近世日本風俗絵本集成』より転載）

馬物具や打物の。物其ものにあらざる気色に。さぞ笑ふらん。さりながら。所存は誰にも劣るまじと。心ばかりは勇めども」云々といった常世の実直な態度と心構えを軽視することなく、長刀を「鉢の木」の小道具の扇に持ち替えつつ、歌舞伎役者としての覚悟を持って挑めば、きっと薪にした盆栽がそれに因む領地に代わったように、帰り花を咲かせる如く成功するでしょうと送り出している。

帰江後も新五郎は『橋南』に「松虫の籠に女や戻障子」句、艶士の『分外』（宝永元年〈一七〇四〉刊）には「傾城の耳を誉たる牡丹かな」以下計三句が入集し、江戸俳人達との繋がりが確認できる。『役者大福帳』（同八年刊）に「中村七三の跡次、今名物男は生嶋殿と存る」・「女中びいき諸芸の花盛、今の世の名物男は新五郎殿」と評判されるように、新五郎は役者としての人気を不動のものとしていくのだが、周知の如く、正徳四年〈一七一四〉の江島生島事件で三宅島に遠流、併せて山村座が断絶となり、江戸は三座へと移行する事態となる。

新五郎に関して述べておきたいのは、鳴立沢西行堂の傍らにある七三郎・初代団十郎の句碑についてである。『犬新山家』で二代目団十郎が「西行堂の傍に、古少長と予が亡父の塔あり。其石の裏に句あり」として

恋やせむ弥陀や唱むけふの月　古少長

新月や苦楽順逆風払ふ　古才牛

の句を挙げる。続いて「これは或人の建し也。其施主の句も石の左にあり／鳴の跡みにも哀はふたりかな」と記されるが、志田義秀氏[41]の指摘するように、『絵具皿』（享保二十年〈一七三五〉刊）の「此石碑は生島鉄松建しよし」の記述から、建碑者が新五郎であったことが判明する。二代目団十郎は、当時まだ新五郎が生存していたため、事件を憚り匿名としているが、この句碑には、俳諧という文芸を通じて新五郎が七三郎ら先人を顕彰し、彼らに連なろうとする意識が看取される。

そして、江戸歌舞伎における、俳諧を通じた七三郎への追慕は、宝暦六年〈一七五六〉の『東風流』に極まることとなる。江戸風の俳諧を顕彰・標榜する同書において、七三郎の辞世と目される「梅華菜種は何を飾るやら」句を立句とした、編者の春来と、少長（二世・二代目中村七三郎）・舞鶴（二世・二代目中村伝九郎）・雀童（七代目中村勘三郎）・藤橋[42]（二代目中村清三郎）・故一（初代中村重助）ら江戸の役者達による歌仙が巻かれるのである。

――注

（1）『役者大鑑』（元禄五年〈一六九二〉二月刊）では団十郎・七三郎と宮崎伝吉となる。

（2）飯島満「初世中村七三郎の去就をめぐって―中村・山村両座における地位―」（『近世文藝』第四十九号、一九八八年十一月）

（3）志田義秀「元祖中村七三郎少長の俳句と句碑　附、生嶋新五郎鉄松の俳諧」（『俳句と俳人と』修文館、一九四二年）

（4）今泉準一氏「中村少長追善句集『のこる露』（資料翻刻）」（『連歌俳諧研究』第二十五号、一九六三年七月）に翻刻が備わる。

(5) 『役者全書』（安永二年〈一七七四〉刊）に「役者俳名を呼ぶはじめは元祖団十郎覚栄居士」とある。ただし、楠元六男氏「享保期俳壇の周縁―二世団十郎の俳諧―」（『享保期江戸俳諧論攷』新典社、一九九三年）は初代団十郎の具体的な活動は『父の恩』・『犬新山家』・『東風流』所収発句以外は知られないとする。

(6) (4) 解題。

(7) 拙稿「江戸俳諧と役者―其角・江戸座の交流圏と『師の恩』への展開―」（『国文学研究』第百九十四号、二〇二一年六月）。なお、同稿では、其角が役者の役柄を句に詠み込む方法を案出したことについて言及している。

(8) 『のこる露』に「中村氏七三郎、姓は天津。行年四十七」、『野郎三座詫』に「七郎右衛門一子中村七三郎」とある。

(9) (2) 同。

(10) 諏訪春雄「元禄歌舞伎三都の芸風とその形成」（『日本文学』第二十五巻第九号、一九七六年九月）

(11) 鳥越文蔵「元禄期の名優像―江戸の役者中村七三郎の場合―」（『演劇学』第二十五号、一九八四年三月。『元禄歌舞伎攷』八木書店、一九九一年に再録）

(12) 飯島満「初世中村七三郎の出自」（『明治大学大学院紀要』第二十五巻第四号、一九八八年二月）

(13) 里圃は宝生流の能役者沾圃の弟子、山本市之丞かとされる。沾圃は磐城平藩主、内藤義孝（露江）の兄、義英（露沾）に仕えた。

(14) 石川八朗氏他編『宝井其角全集　年譜篇』（勉誠社、一九九四年）は元禄十四年〈一七〇一〉頃のことと推定する。

(15) 常陽は七三郎の句を掲載する『華担籠』の編者。『陸奥衙』にも肖像と桃隣への餞別吟「古人の跡を慕ふとや／陸奥のはなに千鳥も声有歟」が載る。

(16) 「七化け」は狗・初冠の殿上人・白髪の老人・禿の小童・若衆の六方・女の怨霊・猩々。なお、『歌舞伎年代記』元禄六年〈一六九三〉の項に「伝に曰、水木辰之助も俳諧に志ふかく、其角の弟子となり、或とき友達涼みに行とて、さりながら羽織もたせん夕すゞみという発句ありとかや。女形の情籠りて面白し」と記される。辰之助の俳号は歌蝶。其角は辰之助の猫の所作を「花の夢胡蝶に似たり辰之助」（『焦尾琴』同十四年刊）、一世を風靡した鎗踊りを「辰之助に申遣す／煤払や諸人がまねる鎗おどり」（『五元集』）と詠んでいる。

(17) 鳥越文蔵「中村七三郎讃―「十能都鳥狂詩」の紹介―」（『演劇学』第二十三号、一九八二年三月。『元禄歌舞伎攷』に再録）。なお、作者「若松梅之助」が鷺水であることは長谷川強氏『浮世草子の研究』（桜楓社、一九六九年）に指摘があり、藤川雅恵氏「『十能都鳥狂詩』をめぐる諸問題について」（『近世文藝』第八十二号、二〇〇五年七月）は「梅林堂華渓」（序）・「不粋軒輟休」（跋）も同じく鷺水ではないかとする。

(18) 其角と鷺水との直接的な交流を示す資料は現在のところ見当たらないが、両者を繋ぐものとして、書肆井筒屋庄兵衛との関係が想定される（藤川雅恵氏ご教示）。この点については改めて調査をしたい。

(19) 『関東名残の袂』巻之二には「江戸下りの駕籠には、京難波の色さま方より、もらひためし起請百三十五通、切髪七十八包、指四十六、放し爪五十七、その他小心中数を知らず」とある。

(20) 大江良松氏「「重巽宛其角書簡」の時期―元禄十二年説と十三年説―」（『山寺芭蕉記念館紀要』第六号、二〇〇一年三月）によると、其角は重巽宛書簡で七三郎の江戸復帰を「いざゝけべ、七三下着と」と報じている。

(21) 土田衛「大阪岩井座『太山寺薬師開帳』前後」（『愛媛国文研究』第十二号、一九六三年二月）

(22) 井上伸子「初代中村七三郎と女方」（『立教大学日本文学』第五十五号、一九八五年十二月）

(23) 林美一氏『好色赤烏帽子　好色美人角力』（有光書房、一九六六年）は元禄九年〈一六九六〉、近江屋九兵衛の刊行かと推定するものの、藤川雅恵氏「資料紹介『好色美人角力』について」（『青山語文』第三十七号、二〇〇七年三月）は林氏が根拠とする広告を掲載する「『好色艶天狗』の刊年も同氏の推定によるものであるため、定かではない」と疑義を呈する。小寺玉晁の随筆『難廼為可話』（天保三年〈一八三二〉成）巻之四には「年号ハみえねど、宝永元の印本なるべし」とある。成立の問題については改めて考えたい。

(24) 松尾真知子『天野桃隣と太白堂の系譜並びに南部畔李の俳諧』（和泉書院、二〇一五年）

(25) 酔生書菴人「好色本作家桃林堂は俳諧師桃隣なり」（『好色ひともと薄』古

典文庫、一九八五年）

(26)『水ひらめ』は元禄十一年〈一六九八〉六月、江戸佐藤四郎右衛門の刊行だが、翌月に不角が板元となり再刊する。不角は同書に二句入集。俳諧・前句付の他にも『色の染衣』（貞享四年〈一六八七〉刊）等の浮世草子や地誌『江戸物鹿子』（元禄二年〈一六八九〉成）といった多方面に亘る著述も試みている。

(27) 長谷川強「解題」（『大東急記念文庫善本叢刊　近世編第二巻　浮世草子集』汲古書院、一九七六年）。ただし、井上和人氏「『関東名残の袂』考―その演劇的趣向一斑―」（『関東学院大学人文学会紀要』第百三十三号、二〇一五年十二月）は本文と挿絵の齟齬から不審が残るとする。

(28) 水谷不倒氏『新撰列伝体小説史　前編』（春陽堂、一九二九年）は『風流鏡が池』を含め、政信が挿絵を描いた作品を挙げつつ、「或は此中に政信の作もいくらかあるに相違ない」と述べる。山崎麓氏「日本小説作家人名辞書」（『日本小説書目年表』国民図書、一九二九年）は「独遊軒好文の梅吟」を政信の匿名とする。

(29)（23）中、藤川氏稿。

(30) 赤間亮「最初の赤穂義士劇に関する臆説」（『歌舞伎の狂言』八木書店、一九九二年）

(31) 復本一郎氏蔵。同氏「完本『橋南』について」（『連歌俳諧研究』第五十八号、一九八〇年一月。『「俳」の精神　芭蕉から井月へ』沖積社、二〇一三年に再録）等に解説がある。その他、同氏『俳句忠臣蔵』（新潮選書、一九九一年）及び拙稿「赤穂義士追善への視線―七回忌集『反古談』―」（『宝井其角と都会派俳諧』笠間書院、二〇一八年）参照。

(32)『江戸吉原叢刊　第四巻』（八木書店、二〇一〇年）に筆者による解題・翻刻がある。

(33) 杉本和寛「赤穂事件虚構化の方法と意味―享受者の視点をめぐって―」（富士昭雄編『江戸文学と出版メディア――近世前期小説を中心に』笠間書院、二〇〇一年）

(34)『高名太平記』に先立ち、『御伽百物語』（宝永三年〈一七〇六〉刊）でも赤穂事件を扱っていることは藤川雅恵氏「鷺水の〈近代〉―『御伽百物語』論―」（『日本文学』第四十七巻六号、一九九八年六月）に指摘がある。これは『傾城武道桜』に次ぐ、極めて早い時期に出された赤穂事件関連の浮世草子となる。

(35)（4）解題。

(36) 井上伸子「江戸の役者」（浅野晃他編『講座元禄の文学　第四巻』勉誠出版、一九九三年）

(37)（4）解題。

(38) 楠元六男氏「『素堂発句　白蓮集解説（万延元年　馬場錦江著）翻刻』（『芭蕉と素堂』竹林舎、二〇一三年）に翻刻がある。なお、素堂の「たきさしや」句は『俳諧五子稿』（安永四年〈一七七五〉刊）中『山口素堂句集』には「悼少長／炷さしや菌朶の中よりこぼれ梅」との句形で載る。

(39) 正木ゆみ「宇治座の浄瑠璃と江戸歌舞伎との交流―初代中村七三郎との関連を中心に―」（『近世文藝』第五十八号、一九九三年七月）

(40)（3）同。

(41)（3）同。

(42)『古今役者四季発句合』による。とすると、『のこる露』編者の藤橋は、あるいは父の中村明石清三郎か。

※本稿をなすにあたり、藤川雅恵氏には貴重なご教示をいただいた。また、愛知県立大学長久手キャンパス図書館にはご所蔵資料の図版掲載をご許可いただいた。ともに記して深謝申し上げる。

※本稿は科学研究費助成事業（基盤研究（C）19K00332・代表　中嶋隆）の成果の一部である。